

論文要旨

氏名 山野 ケン 陽次郎

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

先史琉球列島における貝文化の研究

論文要旨 (別様に記載すること)

別紙のとおり

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク(1枚)を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

論文要旨

先史琉球列島における貝文化の研究

熊本大学大学院社会文化科学研究科

山野ケン陽次郎

日本列島の南に位置する琉球列島では、先史時代の多くの遺跡から貝殻を加工した「貝製品」が出土する。琉球列島産の巻貝は大形かつ彩色豊かなものが多く、当地域にしか存在しない様々な貝製の実用品や装飾品が製作、使用されてきた。貝製品は、当時の南島社会にあらゆる面で強く結び付いており、琉球列島には「貝文化」とも総称すべき、貝を巡る様々な物質文化が展開していたのである。よって貝製品を研究することで当時の人々の生業や精神性の一端を窺い知ることができる。また、琉球列島産巻貝を利用した貝製品は、弥生時代以降になると九州から北海道、あるいは朝鮮半島まで分布を広げており、交易品として広域に展開していた。先行研究では、この貝を媒体とした遠距離長期間の交易を「貝交易」と呼んでおり、その研究によって当時の人々の移動や他地域との交流と内容を明らかにすることができる。このように、琉球列島の貝製品を研究することで当時の人間の生業や精神性、交流など様々な側面を明らかにでき、先史社会の復元を行うことが可能である。

しかし、琉球列島における貝文化の登場や変遷は部分的にしか明らかにされていない。先行研究では琉球列島の貝製品の分析が一部を除いて不足している。また、琉球列島にのみ出土する特殊な形態の貝製品の出現背景を、古代中国からの文化伝播で説明することが多いが、統一の見解が得られていない。さらに、これまでの貝製品研究は形態や素材の違いに着目した分析が行われることが多かったが、貝製品の製作技術に関する視点が欠けている。博士論文では、先史琉球列島で出土する貝製装飾品を研究対象とし、考古学的分析を行うことで、先史琉球列島の貝文化の変遷と展開を示し、その歴史的背景を明らかにすることを目的とした。

本論中、第1章では本研究の目的とその意義を述べている。第2章では琉球列島の貝製品を巡る先行研究をまとめ、その問題点について取り上げた。第3章では本論における研究方法を提示した。この際、貝製品に対しては「機能」、「状態」、「形態・加工・貝種」の3つの観点から新しい分類概念を設け、貝製品の製作技術に関しても認識と用語の統一を図った。さらに本論で扱うⅠ～Ⅷ期の8時期区分を設け、琉球列島を5地域に区分し、次章からの分析の基盤を整えた。本論の分析は第4章、5章、6章で行い、第7章では本論における分析の結果に先行研究の成果を加えることで先史琉球列島の貝文化の変遷と展開を6つの段階に分けて示した。以下に第4章からの分析結果と、第7章で示した貝文化の変遷と展開の概略を示したい。

第4章では、琉球列島でも特に特徴的な貝製品が人骨に伴って大量に出土する種子島広田遺跡の再検討を行い、埋葬施設と埋葬方法、共伴遺物の変化と消長を明白にした7つの埋葬段階を提示した。これを根拠とし考察では、広田遺跡が古墳時代貝交易に参入する過程と広田遺跡の貝文化の起源について、先行研究と異なる見解を示した。従来、広田遺跡に埋葬された人々は、古代中国との関係性が指摘される貝符や竜佩状貝製品などを含む貝製品を大量に消費する集団として、貝交易上に突如出現したと考えられてきた。しかし本論では、広田遺跡はオオツ

タノハ製貝輪の着身習俗を持つ種子島在来の集団が、新しい貝輪素材であるオオツタノハを需要した本土との接触を通じて貝交易に参入し、本土や奄美・沖縄諸島との交流を経て、漸移的かつ段階的に装身具習俗や埋葬習俗を変化させ、結果として特殊な形態の貝製品を含む、南海産巻貝の大量消費遺跡となったと解釈した。また、広田遺跡の貝文化については、奄美・沖縄諸島や本土との接触により、南方から貝素材と貝製装身具習俗を、北方より鉄製利器を入手するなど、両文化圏から製作技術や装身習俗、素材を取り入れたことで多彩な貝製装身具を誕生させたという成立背景を提示し、中国伝播説に対して否定的見解を示した。

第5章では、琉球列島出土貝製品の製作技術に着目し、製作実験や遺物の詳細な観察を行うことで琉球列島における2つの製作技術の出現と盛行を明らかにした。一つ目は縄文時代後期並行期に琉球列島で展開した擦切技法である。当該時期の獣形貝製品に擦切の痕跡を確認し、その加工具として同時期に盛行する扁平板状の刃部を有する石器である熱田原型石器を想定した。そして縄文時代後期並行期以降、奄美・沖縄諸島で擦切技法が盛行したこと、またこの技術が九州以北から伝わった可能性を示した。二つ目は古墳時代並行期に登場する彫刻技術である。種子島広田遺跡では曲線的かつ立体的な彫画が貝符や貝輪に施されている。加工痕を詳細に観察した結果、弥生時代並行期以前の彫画と異なる加工痕跡を見出すことができた。これらの彫画を施した加工具として鉄製利器を想定でき、古墳時代並行期における本土からの鉄器の搬入の可能性を示した。

第6章からは貝輪や貝製玉類、貝製指輪、貝製垂飾の個別的検討を開始した。各節では、貝製品の集成を行い、これらを素材、形態、加工状況などから分類し、その分類によって時期的・地域的傾向を把握した上で、製品の変遷と展開を明らかにするという分析手順をとった。分析の対象としたのはソデガイ科製貝輪、イモガイ科製貝輪、マクラガイ科製玉類、ノシガイ製玉類、貝製指輪、広田下層タイプ貝符、獣形貝製品、サメ歯状貝製品、獣形貝製品および鎌状貝製品、獣牙状貝製品および竜佩状貝製品、円盤状貝製品、広田上層タイプ貝符の計14種類の貝製品である。分析結果を統合すると以下の4つの傾向が明らかとなった。

一つ目は琉球列島では縄文時代前期・中期並行期に貝製装飾品が登場しており、その内容が貝輪や貝製小玉、貝製玉類など単純な加工を示すものが主であったことである。二つ目は縄文時代後期並行期になるとサメ歯状貝製品や獣形貝製品、貝符など、貝本来の装飾性でなく、表面を丁寧に研磨し、外形に抉りを施すなどして装飾性を高めた貝製垂飾が認められる点である。三つ目は縄文時代後晩期並行期に盛行した貝製装飾品の多くが弥生時代並行期になると衰退あるいは消失していること、またこれに対してソデガイ科製貝輪とイモガイ科製貝輪に関連する資料が増加することである。四つ目は広田遺跡下層埋葬に伴う貝符や竜佩状貝製品などの貝製装身具が、縄文時代並行期からの琉球列島在地の装身具文化と本土からの鉄器の搬入により説明できる点である。また、一連の傾向は大隅諸島から沖縄諸島にかけてのものであり、先島諸島は異なる変遷を示す。

第7章では、第6章までの分析で得た結果を基盤とし、琉球列島の貝文化の変遷と展開を提示した。そこで、本論で設定したⅠ～Ⅷ期の年代観を用いて、新出する貝製品により、画期を定めることで先史琉球列島の貝文化における6つの段階を設けた。また、その画期が訪れた理由と歴史的背景について考察を行っている。以下に各段階の説明を行う。

第1段階は本論のⅠ期にあたり、爪形文系土器の段階に相当する。本論で検討した貝製装飾品はこの段階に認められず、鎌状貝製品や匙状貝製品が散見できる点が当該段階の特徴である。

ただし、これら貝製品の登場に関しては検討不足のため今後の課題とする。

第2段階は本論のⅡ・Ⅲ期にあたり、条痕文系土器、隆帯文系土器の段階に相当する。この段階には貝製装飾品のうち貝輪、貝製小玉、貝製管玉、貝製玉類、円盤状貝製品が認められようになる。環状や円盤状、管状など形態が単純な貝製品、あるいは貝そのものの造形を活かした装飾品が登場するのがこの段階である。装飾品の出現背景は、当該時期の曾畑式土器の南下や室川式土器の分布の北上を考慮すると九州からの装身具習俗の伝播あるいは琉球列島内の自発的登場の2つが考えられる。ただし、貝輪素材を獲得できる環境の先島諸島に貝輪が分布しない点を考えると、自発的登場よりも貝製習俗の伝播の可能性が高いと考えられる。

第3段階は本論のⅣ・Ⅴ期にあたり、前半は沈線文・籠目文・点刻線文系土器、後半は肥厚口縁系土器の段階に相当する。この段階には獣牙状貝製品、サメ歯状貝製品、獣形貝製品など、獣の牙やサメの歯、動物の姿を模造したものである。サメ歯状貝製品や獣形貝製品の初期の形態には写実的な表現が認められるが、後半になると抽象化していく。また、肥厚口縁系土器の段階にはイモガイ科製貝輪が登場している。サメ歯状貝製品や獣形貝製品、イモガイ科製貝輪は、その製作において擦切技術の導入が必要不可欠であった。擦切技法の起源は不明瞭だが、当該時期に九州との恒常的な交流があったことと、九州でも擦切具が石器製作に用いられていたことを加味し、九州から伝播したものと考察した。また、先島諸島では石垣島でイモガイ科製小玉やイモガイ科製玉類が認められるが、具象的形態を有する貝製品が認められない。この点も奄美・沖縄諸島の貝製垂飾の出現に際し、擦切技法が大きな役割を担った可能性を高めている。

第4段階は本論のⅥ期にあたり、無文尖底系土器の仲原式、浜屋原式、阿波連浦下層式、弥生早期～中期土器の段階に相当する。この段階の前半には九州型のソデガイ科製腹面貝輪や貝製指輪が登場するとともに、獣形貝製品やサメ歯状貝製品、タケノコガイ科・イモガイ科製玉類など第3段階に展開した多くの貝製品が衰退する。しかしその一方で弥生時代中期後半以降になるとノシガイ製玉類、マクラガイ科製玉類、ソデガイ科製背面貝輪、獣牙状貝製品、円盤状貝製品、貝符などが再度盛行し始める。このような状況は貝交易の開始と交易システムの変化に起因すると思われる。当該時期にはソデガイ科・イモガイ科製貝輪の未成品や貝集積遺構が多く検出される。本土の需要に答えるために原貝獲得や貝輪製作に多くの労力が割かれたため、在地における貝製装飾品の生産活動が停滞したと思われる。しかしこの状況は長くは続かず、弥生時代中期後半以降には本土における貝輪の需要が低下し、貝交易に関連する諸活動が一度鎮静化したため、改めて在地の貝製品製作が活発化したと想定できる。これらの貝製品は一部縄文時代並行期に盛行した貝製装身具の伝統を引き継ぎつつ、続く第5段階の広田遺跡の登場に影響を与えた。

第5段階は本論のⅦ期にあたり、無文尖底系土器の大当原式あるいはくびれ平底系土器の一部を含む段階である。この段階になると無文具符、獣牙状貝製品やマクラガイ科製玉類、円盤状貝製品、貝製小玉など、第4段階後半にみられる貝製装身具が大隅諸島に影響を与え、広田下層埋葬第3段階の貝製装身具セットが登場する。また、続く広田下層埋葬第4・5段階に大量の貝製品が消費され、その過程で「蝶型文様」を施した貝符や竜佩状貝製品が登場する。第5段階後半、広田遺跡第6段階頃には有文具符無挾Ⅱ類や列点文の施された貝輪が大隅諸島から沖縄諸島まで広く展開するようになり、先島諸島を除く地域で類似した貝製品が出土するようになる。またこの段階の先島諸島は無土器時代に相当し、ノシガイ科製玉類や円盤状貝製品、

貝製小玉などが利用される。

第6段階は本論のⅧ期にあたり、くびれ平底系土器のアカジャンガー式やフェンサ下層式の段階である。この段階になると、一部の貝輪や貝製玉類、貝製小玉などを残して第5段階までの貝製装飾品が消失する。一方で広田上層タイプ貝符が大隅諸島を主体とし奄美・沖縄諸島でも一定量出土するようになる。貝製実用品の中で目立つのは皿状貝製品や有孔貝製品である。そして、第6段階後半になると上層貝符は単純化した後に消失し、貝製品の利用は琉球列島においてわずかな痕跡を残し、衰退していった。

以上、琉球列島の貝文化の変遷と展開、またその背景について述べてきた。貝文化の画期は、常に九州以北の動向と連動していることが分かる。琉球列島の貝文化は他地域からの装身具習俗や技術の伝播、また、九州以北との交流や交易などに強く影響を受けており、各段階で大きな画期を迎えている。ただし、先史琉球列島の人々は他地域からの製作技術や装身習俗をありのままに受容したのではなく、南島在地の貝や骨などの素材を用いて、他地域からの製作技術を転用することで、南島独自の装身具文化を形成させたと理解できる。この状況は琉球列島において弥生時代以降に農耕や古墳築造など各時期の主たる文化要素を需要していない状況とは相反する。これには琉球列島を取り巻くサンゴ礁地形や亜熱帯気候などの諸環境と日本列島の南端で島嶼地域という地理的要因が考えられる。しかし同時に、この特異な環境こそが琉球列島の生業や習俗などの基層文化を育てており、貝にサメ歯や蝶などの動物モチーフを表象するような日本列島でも独自の精神文化を発展させたと考えられる。